

キャサリン・サムソン『東京暮らし』（四）

牧 野 陽 子

第三章（前）

日本人に関して不思議で矛盾することのひとつは、どこへ行っても眼につくのは男女を問わずせつせと田圃で働く人々の姿であるにもかかわらず、また西洋文明のために人々がだんだん時間に容赦なく拘束されるようになっていくことがわかつていくにもかかわらず、それでもなお、みんなゆったりと寛いでいるような印象を受けることです。近頃は大きなデパートも数多く、大勢の従業員が毎日決まった時間に汽車や電車の吊り皮にぶらさがって仕事場へと通勤していますし、大小の工場も無数にあります。タイピストや事務員を抱える会社が何千とあり、当然ながらこうしたところで働く人達に余暇を楽しむ時間がそれほどあるはずもありません。

しかし日本人というのは、必要に迫られない時は喜んで全く何もしないでいられるものなのです。通りに面して開け放たれた小さな店の中を覗けば、新聞を広げたままこっくりこっくり居眠りしている人や、友達とのお喋りにいつ果てるともなく興じている人の姿が目に入ります。暑い季節には、行商人の丁稚がほとんど二つ折

りになって自転車にもたれかかり、頭を腕にのせてぐっすり寝込んでいるのさえ見ます。なかでもヨーロッパ人の目に面白く映るのは、たとえ混雑した大通りでも、男も女も子供も道路に尻をついてべったりと座り込んで、人やバスが来るのを待っていたりすることです。そして眠ることに関しては、これほど寝こむのが上手な民族はかつてなかったのではないのでしょうか。汽車の中でもバスの中でも、驚くような姿勢で居眠りしていて、傍目には実に居心地悪そうに見えながら、本人は構わずやすやすと寝ているのです。

彼らには大いなる活力があります。巢の中の働き蜂のような活力です。しかもその活力を体の中からすっかり捨て去るといふ、真に東洋的な能力をも持ち合わせているのです。そしてそれが現実にはいったいどのように機能しているのか、誰が蜂で、いつ誰が東洋的静穩に浸っているのか、不思議に思って考えだすと、納得のいく答えは一つしかありません。家制度です。それは複雑に枝別れた血縁関係の中心であり、その中ではいかなる矛盾が表れてもおかしくはないでしょう。でも日本人の家の構成員はチーム精神のようなものを発揮します。つまり、家としての種々の責任がある程度まで全部の構成員に及ぶという、まさにその事実が家族全体に一種の弾力性を与えているのですが、それは、一人がだめなら別の者がという風に、それぞれのやり方で家を支える人が常に誰かしら、いてくれるからなのです。

日本人が生活面で大いなる手腕を発揮していることは認めねばなりませんまい。彼らは西洋の文物をぬかりなく研究し、その賢い頭脳と器用な手先を以て、私たちに作り出せる物ならほとんどどんな物でも作ってみせることができるようになります。彼らの国は英国よりもはるかに電化が進んでいます。学校は素晴らしく、立派な道路も多少あります。私たちのスポーツや競技を従来のものに加えて取り入れて、見事に成功しました。しかし、

そうしながらも彼らは常に、自分たちの文明に固執し、伝統たる簡素な習慣を守り続けるのです。その中には禁欲的なまでの質素さと私たちには思われるものもあります。たとえば、高い地位にある年配の人で、豪華な現代風の邸宅を所有しながら、どこか裏の目立たぬ所の小さな日本家屋で先祖とまったく同じように畳の上に座って暮らしている、などという例はたくさんあるのです。

二つの世界の両方の長所の組合せは、日本人にとって大きな強みとなっています。最も保守的な人間の望みうるかぎりの保守主義を貫き、さらにその上で、必要だと思われるものはすべて西洋から取り入れるのです。

でも日本人の一番顕著な特徴が認められるのは、自然との密接な関わり、自然の芸術的な鑑賞においてこそでしょう。日本の小さな家々は、恒久的な住居というよりは、まるで日差しと寒さを一時的にしのぐ場所を作るために大地から芽生えてきたかのような印象を与えます。そのため日本人は、気象に関するあらゆる事柄に親しんで細かく気付くようになり、そして彼らの審美的感受性はあまりに鋭敏なので、物理的環境の認識が美への思いと、他のどこにもみられないだろうと思えるほど強く結びついているのです。

在郷の人々の勤勉な暮らしぶりにもかかわらず、そこには自然を相手に奮闘しているという印象はありません。彼らはむしろ、万物が生成消滅しては絶えず生まれ変わる素朴な自然界の一部であるように思えますが、同時にこの循環作用のすべてが芸術に昇華される洗練された感覚世界にもまた属しているのです。たとえば、あなただったら、窓の外を眺めて雪解けの光景を見れば、ぬかるみの中を歩いて行くのはどんなに大変だろうかと思うでしょう。でもそこに日本人がやってくれば、誰でも必ず嬉しそうに笑って「何と美しい！」と感嘆するに違いありません。あるいは、二三日前に活けた花が萎れかかっているので捨てようとするところだったとします。

すると、家の者の誰かしらが、あなたの意図には気付かず、ただ縮れた葉と散りゆく花びらの魅力に目を留めて立ち止まり、しばしその風情を愛でるのです。忙しい働き蜂が、せわしく蜜集めをする手をふと休めて、日光浴を楽しんでいるのです。

若い女性の存在は日本人が恵まれている主な美点のひとつであり、日本の社会を美しく彩っています。日本で数日を過ごせば、心地よく行き届いた婦女子の尽くしぶりに誰しも感銘を受けずにはいられますまい。日本の男性が、何から何までこれらの優しく親切な女性がいなければ、到底やっていけないのは明らかです。ただ単に賃金が低いという事実以上の何かがそこにはあります。賃金の低さは、ただ彼らの無欲な優しさの魅力と相まって日本の光景のそこかしこに登場するにすぎません。

日本の男女の関係には、彼らのアルカディア的資質に由来すると思われる、微妙な調和があります。というのも、日本の文明の形式主義にもかかわらず、その底には大いなる単純さが残っているからです。貴婦人は貴婦人であり、百姓女は百姓女であるけれど、両者の間には共通する上品さがあり、それがこの国の魅力のひとつになっています。貴婦人は彼女を生んだ素朴な大地からそれほど掛け離れてはいないし、一方、百姓女の背後にあるのも、古代以来の単一民族にのみ固有な、連綿たる長年の穏やかさに他なりません。

日本女性は、まさしくこの民族の母です。彼女たちの誰一人として、たとえば、体が弱すぎたり忙しすぎるために赤ん坊を育て、世話をする事ができないなどは、思いもよらぬことでしょう。日本では単純明快な理由から離婚はないのです。

事実、日本女性の無私にして優しい母性は、国家にとって測り知れないほど貴重なものに違いありません。そ

して今や、複雑化した現代世界の影響が日本にも及んできているために、彼女たちにも家庭という限られた区域から脱出する傾向が見られるのは喜ばしいことです。なぜなら、彼女たちはただ美しいだけなのではなく、感受性も分別もあるのだし、家庭という私的な場のみならず国に対して社会的にも大いに役立つ方法がたくさんあるはずだからです。子供たちが被害を受けることは決してないでしょう。日本ではつねに子供第一なのですから。でも、知的な子供にとっては知的な母親を持つに越したことはありません。そして並みの人以上に賢く、血気盛んで教養あふれる女性たちが非常に無駄にされているという感を時に否めません。外の世界の現代精神の息吹を全く受けることのない、旧態依然たる人々の輪の中などでは、時々かなり悲劇的な例に出会います。高等教育を受け、もっとまじな運命にふさわしいような賢く魅力的な娘たちが、相性などおかないしに人が彼女に選んだ相手と結婚することを余儀無くされていることもあるのです。あるいは、彼女の家に家名を継ぐべき男子がいなかったのかもしれませんが。その場合は、家族会議で婿養子として選ばれた誰かと結婚し、そうすることで一族を存続させるのが彼女の務めです。また時には政略結婚が彼女に押しつけられることもあります。彼女はまったく無力です。彼女は言われた通りにしなくてはなりません。結果が満足のゆくものになることもあるでしょう。夫は彼女に相応しい男で、彼女はその才能を子供に伝えることができるかもしれません。しかし、よほど運に恵まれない限り、彼女に知的水準を維持させてくれるようなものは彼女の人生には何もないだろうし、そして運が悪ければ彼女の脳は刺激の欠如のためにやがて衰えはててしまいうに違いありません。

何年も前のこと、知り合いにちょっと独りよがりの英国婦人がいたのですが、彼女があるとき私に、子供たちの教育と密接に関わることを大切にしていると言いました。ところが、それはどういことですか、と私がたず

ねますと、彼女は、毎日子供たちより一レッスン先に進むよう心掛けていると答えたのです。とたんに、掛け算の表やらラテン語にフランス語の動詞の活用表、戦争や国王の年表などが次々と脳裏に浮かんできて、私はショックを受けました。そして私は、それが子供たちにとって刺激になるとは思えないし、母親が自分自身の教育を続けた方がむしろ子供たちにとっては得る所が多いのではないかと思う、と述べたのです。

もちろん、女性の中には、掛け算の低い段階から先に進めなかったり、また動詞や名詞を学校で習っても文学の小道を散策するには到らない人も大勢いるのは事実でしょう。しかし、むしろこういう女性たちの方が、そう簡単に頭脳を眠らせてしまえないような女性たちよりも、人生を楽に生きることができがちなのです。日本のように、機知や知性などほとんど排除するほどまでに善良さと美しさの資質ばかりが妻と母に要求されてきたような国では、特にそうなのだと思います。

しかし日本もまた、他国同様に変わっていくことでしょう。優れた学校をつくり、西洋式の課業や体操訓練、および東西両世界の文芸の何がしかをカリキュラムに取り入れながら、その影響を受けずにいるのは不可能です。この熱心で小柄な人たちが、日本の若い女性たちのために、毎年どんな仕事や職場の門戸が開かれつつあります。そしてやがては彼女たちもその実力で、市民として現在よりも高い地位を占めるに到らないはずがありません。

彼女たちには並外れた美德があります。この国では、どこへ行こうにもすぐに誰かしら日本の女の子の優しい心遣いの世話になってしまいます。日本の男性が、何につけ守護天使に守られた幸せな生活を送るのに慣れきっていて、現状を急いで改める気がないのは、充分理解できます。誰だって改めたくないでしょう。

この極めて日本独特の奉仕のひとつの典型として、バス・ガールをあげることができるかもしれません。時々彼女たちはカーキ色の上着とズボンという恰好で、男っぽい縁なし帽に押し込まれた長い黒髪の手からほつれ毛が出ていたりします。そしてこのいでたちが、やや〇脚気味で頭でかちの小っちゃな体に似合っているとは言えないけれど、その小柄な姿にはそれでもなお、確かな魅力があるのです。彼女は甲高く囀るような声で、たえずバス停の名を知らせ、客が切符を買うと丁寧な言葉でお礼を述べます。降車予定の所に着けば、客が乗り過ごしたり荷物を置き忘れられたりしないよう気をつけてくれ、寝ている客は恭しく起こしてくれます。そして少年のような服装の彼女が、バスから歩道に降りる客に向かって、御利用賜りまして有難うございますと最後にお礼をいしながら、きちんとお辞儀をして見送るのです。時には青いサージの上着に小さめのスカートをはいている場合もあります。こちらの方がより女らしい服装といえましょうが、悪天候の折りに田舎を走るには、おそらくさっきの服の方がずっと実用的なのでしょう。

日本中バスで旅をしてまわれば、いろいろな人と道連れになります。いつもガイドさんたちはいかにも日本女性らしい如才なさで乗客を取り扱うのです。ある時のこと、町から地方の有名観光地に旅行で来ている陽気な一団に出会ったのを覚えています。明らかにお酒が一二杯すでに入っていたこの人々には、世の中が何でも愉快に感じられていたのでしょう。当然、彼らの注意はバス・ガールに向けられます。彼らは御機嫌で、彼女の役目が一行を最高に楽しませることにあると、たぶん思い込んでいます。彼女のよく通る高い声が、様々な見所や古戦場などを丁寧な日本語で紹介していくたびに、いちいち彼らが裏声で彼女を真似てからかいます。そして彼女の方は、まるで寛大な母親が家族の中の元気のいいおどけ者に対するかのように彼らに微笑みかけな

がら、臆することなく朗唱を続けたのでした。

店の売り子もまた、いつも私たちの身近にいます。そして彼女が私たちに応対するのにどれほど忍耐を要するかは、神のみぞ知りましょう。何しろお客の私たちは、往々にして優柔不断な上に厄介な存在なのです。ここの日本の買い物客は私たち西洋人ほど気難しくはないでしょうが、だからといって、売り子さんが忍耐を示さなくていいというわけではありません。今度は和服を着た彼女が、綺麗にお化粧をし、優しく親切に美しくしてここにいて、そして男女の人波が、こっちの品物をいじったり、あっちの品物に感心したあげく滅多に物を買うこともなく、彼女の受持ち場所の中を漂い歩くのを、立って眺めているのです。

実際、この店舗は、仕事と遊びを組み合わせることに対する日本人の天賦の才の何よりの好例を見せてくれます。そもそも店というのは、品物を売るという目的のためには存在すると人は思うでしょう。ところが、これほど物を売ることには不熱心な国というのも私は見たことがありません。これもまた、この楽しい国の奇妙なパラドックスの一つのようです。日本人は、こちらがあらかじめ彼らと協定を結ばない限り、いたる所で物を買ひまくって私たち他の者を市場から追い出してしまう。そして、世界中のあちこちに見受けられる日本人の一般的イメージとは、折々の芸者パーティーと柔道の試合以外にはただ安物を何万と作って売って売って売っていくことしか、およそ一生涯頭のない、相当悪質な連中であるというものです。そしてもちろん、日本人は実際そうしているのですから、よけいに、国内での店頭光景や商売方法が一層不可解な矛盾となるのです。